


縦組み、ルビと脚注

1 縦組文書

日本語の縦組用の文書スタイルには `tarticle` と `hook` の二つがある。次は縦組論文の場合で、通常の論文スタイルでは `\documentclass{tarticle}` で始まるが、縦組論文では `\documentclass{tarticle}` と始める一行が異なっている。

```
縦組み論文スタイル
\documentclass{tarticle}
... プリアンブル部
\title{題名}
\author{著者名}
\date{日付}
\begin{document}
\maketitle
.....
... 本文
.....
\end{document}
```

1.1 ルビをふる

漢字などにルビをするためのパッケージには `ruby.sty`¹ または `furikana.sty`² などがある。無用なトラブルを避けるためにも、日本語に関するパッケージ（スタイルファイル）を利用する場合には、利用する「」環境に応じて読み込むパッケージの文字コードを一致させておくとうよい。

```
_____ ruby.sty _____
\documentclass{jsarticle}% 横組み論文の場合
  ↑ ↓ どちらか一方をスタイルとして宣言
\documentclass{tarticle}% 縦組み論文の場合
....
%プリアンブル部で ruby 利用を宣言
\usepackage{ruby}
....
\begin{document}
.....
\ruby{熟語}{ふりがな}
.....
\end{document}
```

```
_____ furikana.sty _____
\documentclass{jsarticle}% 横組み論文の場合
  ↑ ↓ どちらか一方をスタイルとして宣言
\documentclass{tarticle}% 縦組み論文の場合
....
%プリアンブル部で furikana 利用を宣言
\usepackage{furikana}
....
\begin{document}

\kana{熟語}{ふりがな}
.....
\end{document}
```

¹ `ruby.sty` <http://www.nls.ics.saitama-u.ac.jp/~tohru/ja/Exports/External/Chosho/ruby.sty>.
² `furikana.sty` <http://homepages3.nifty.com/xymtex/fujitas2/texl2atex/tategumi/furikana.sty>.

1・2 脚注

横組文書における脚注`\footnote{. . .}`は、縦組の場合にはその「列」の下でなく、左端または最後ページに追い込まれてしまい具合が悪い。縦組のこうした脚注の不具合を補正するパッケージが`kyakuchu.sty`³で、次の書式に従う。まず、マーク付きで脚注本文を`kyakuchutext{マーク}[脚注文]`で定義しておき、それ以降の本文の箇所で`kyakuchumark{マーク}`によってマークを参照して脚注を付けるのである。

```
_____ kyakuchu.sty _____
\documentclass{tarticle}% 縦組み論文
....
%プリアンブル部で kyakuchu 利用を宣言
\usepackage{kyakuchu}
....
\begin{document}
...
\kyakuchutext{脚注マーク 1}{脚注文}
\kyakuchutext{脚注マーク 2}{脚注文}
...
\kyakuchumark{脚注マーク 1}脚注を付けたい本文
...
文献\kyakuchumark{脚注マーク 2}で解説....
```

パッケージ`kyakuchu`を使った具体例を以下にします。`\footnote{. . .}`も使っているので、その効果を検討されたい。

³ `kyakuchu.sty` <http://homepages3.nifty.com/xyntex/fujitas2/texl2atex/tategumi/kyakuchu.sty>.

これをタイプセットすると次の結果を得る。

```
\documentclass[12pt]{article}
\usepackage{furikana}
\usepackage{kyakuchu}
\begin{document}
歌枕
\footnote{
歌枕とは、和歌に引証される地名のこと。
}として、
\kyakuchutext{A1}{福島県白河市にあった奥州街道の関所。}
\kyakuchutext{A2}{芭蕉「おくのほそ道」
萩原 恭男 校注、岩波文庫七九（一九九一）。}
\kyakuchutext{A3}{蓑笠庵 梨一「奥細道菅菰抄」（おくのほそみちすがもしょう。
文献\ref{A2}に付録として掲載）の注釈が、
典拠を明らかにしている。}
\kyakuchumark{A1}白河の関は古来有名である。
ここより外は\kana{陸奥}{みちのく}として、
人々の旅情をかきたてる場所であった。
松尾芭蕉\kyakuchumark{A2}「奥の細道」
の白河（白川）の関の条には、この歌枕を読み込んだ
\kyakuchumark{A3}古歌の一節がさりげなく引用されている。
\end{document}
```

歌枕⁴として、¹白河の関は古来有名である。ここより外は陸奥^{みちのく}として、人々の旅情をかきたてる場所であった。松尾芭蕉²「奥の細道」の白河(白川)の関の条には、この歌枕を読み込んだ古歌³の一節がさりげなく引用されている。

1 福島県白河市にあった奥州街道の関所。

2 芭蕉「おくのほそ道」萩原恭男校注、岩波文庫七九(二九九一)。

3 蓑笠庵 梨一「奥細道菅菰抄」(おくのほそみちすがもしょう。文獻心に付録として掲載)の注釈が、典拠を明らかにしている。

4 歌枕とは、和歌に引証される地名のこと。